

# ドゥンス・スコトゥスの形而上学

——形而上学の第一主題は「存在」ens であることを巡って——

八 木 雄 二

## はじめに

ドゥンス・スコトゥスが彼の形而上学をどのような学として規定したかは案外に困難な問題である。実際、彼の真作と認められているすべての作品に基づいてそれを規定しようとしても、かえって最終的決定を見合わせている多くの記述によってその企てが挫かれることは、今日までの研究ですでに明らかである<sup>1)</sup>。しかしながら、現在進められているテキストの批判的校訂作業は『オルディナチオ』と『レクトゥーラ』の初めの部分と<sup>2)</sup>、『第一原理論』<sup>3)</sup>、『任意討論集』<sup>4)</sup>に限られている。そしてこれらの作品は神学についての規定をたしかに多くもっているが、形而上学への直接の言及は数えるほどしかない。

ではスコトゥスが形而上学の規定に消極的に見えるのは、スコトゥスが、形而上学は存在であるかぎりの存在を主題とするという、トマス・アクィナスの示していた規定で満足していたからであると判断してよいのだろうか。

この憶測が誤りであるのは、スコトゥスが神学を規定する際に、学一般の規定を単なる「主題」ないし「対象」という言葉によってではなく、「第一主題」*primum subiectum* ないし「第一対象」*primum obiectum* という、より限定された言葉によって示していることから明らかである。すなわち、スコトゥスは学の主題ないし対象のうちに、その主題の全体を潜勢的に含むような「第一のもの」を、特別に示そうとするのである<sup>5)</sup>。

たしかに、これだけのことなら大した問題にはならないのかも知れない。なぜなら、これだけのことなら、われわれはスコトゥスに従って「存在であ

るかぎりの存在」を潜勢的に含む「第一のもの」を見出せばよいだけのことである。ところがスコトゥスの記述はわれわれ研究者を極度の混乱に陥れるのである。というのも、スコトゥスは学の第一対象の一般規定を示したあと、すぐに学的認識の第一対象と能力の第一対象は区別されるべきであると主張しているからである<sup>6)</sup>。ところで、スコトゥスは、一方でたしかに形而上学の第一対象は「存在」であると述べており、他方、「存在の一義性」を主張する際には、「存在」を知性能力の第一対象として扱っている。したがって以上の事実からすれば、知性の第一対象としての「存在」と、形而上学の第一対象としての「存在」は、スコトゥスにおいて区別されなければならないと結論せざるをえない。ところが、スコトゥスのテキストを読み進むかぎり、実際にはそれらは同一であると思われないのである。

ベリユベ神父はいささか異なる視点からこの困難に言及している。「さらにまた、『オルディナチオ』に即してさえ、一義性が何に存しているのか、またどのような関係をスコトゥスが存在の一義性と知性の対象としての存在の間に規定しているのか、明確にすることは決して容易なことではない。というのも第一対象の概念それ自身が成熟途上にあり、スコトゥスの『任意討論』第十三問題のうちにはしか最終的な決着はないであろうからである<sup>7)</sup>。その理由はフランシスコ会派の人々の中で、またガンのヘンリクスにおいて、流行になっていた第一対象の概念がつぎのようなものだったからである。つまり諸科学とその対象を考えて見る場合に、その学によって達成される特定の諸対象を潜勢的に含んでいる或一つの対象が、第一対象なのである。たとえば形而上学は存在の概念のうちに含まれており、すべてのものの知は神の本質のうちに含まれている。他方、スコトゥスにとって能力の第一対象は、その能力を固有の力によって動かすところの対象すべてに共通の何かである……」<sup>8)</sup>。

ベリユベ神父の言葉は歴史の複雑さに及んでいる。言うまでもなくわれわれは歴史には関わらない。しかしスコトゥスが当時のフランシスコ会、また討論集会で名を馳せていたところの<sup>9)</sup>ヘンリクスが用いていた「第一対象」

という概念を取り入れていたこと<sup>10)</sup>、そしてその概念が充分成熟していなかったことは留意しておくべきことかも知れない。さらにまたスコトゥスが主な論敵としたのはこの問題においてもトマスではなくヘンリクスであったことは、われわれの研究の背景に必要な形而上学の概念は、トマスからではなく、ヘンリクスから受け取らなければならないことを指示している。

しかしながら、われわれはヘンリクスの形而上学の規定をあらかじめ探究する余裕はない。この点では哲学の歴史を総観するようなブルノワの最近の論文がよい資料を提供してくれている。スコトゥスがヘンリクスを通して、アヴィチェンナの解釈を伴うアリストテレス形而上学を受け取っていたことはすでによく知られた事実であるが<sup>11)</sup>、ブルノワはこの点をよく理解して、アヴィチェンナとヘンリクスの形而上学に関するテキストを重ね合わせることによって、スコトゥス以前の形而上学の概念を簡略に明らかにしてくれている<sup>12)</sup>。われわれはスコトゥスの研究の背景となる過去の形而上学の概念についてはこのような研究にまかせて、スコトゥス自身の形而上学の正確な規定を、最近の校訂版テキストに基づいて研究することにしようと思う。

## 1

スコトゥスは『オルディナチオ』の或る個所でつぎのような註記を付け加えている。「第一の学の主題は、その学と一緒に既に知られている。すなわち、名によって指示されているものが、『存在するか』*si est*、また『何であるか』*quid est* が、第一主題に関してはすでに知られているのである。なぜなら、すべての学は自身の第一主題について『存存するか』とも『何であるか』とも、問うことはないからである。それゆえ、それについては全く問われえないか、または先行の学において問われるかの、いずれかである。ところで、第一の学に先立つ学はない。それゆえ、その第一主題については、いかなる仕方においても、『存在するか』、『何であるか』、と問われることはない。それゆえ、それは端的に単純な概念である。それゆえ、それは存在(ens)である」<sup>13)</sup>。

ここで第一の学とは、言うまでもなく形而上学である。スコトゥスは、その学の第一主題はその学が他のいかなる学にも先行しているゆえに、「存在するか」も、「何であるか」も、問われることのないもの、すなわち、両者に関してまったく自明でしかないものでなければならないと論じ、それは「存在」ens であると結論している。

われわれはまずこの論述の根拠となっている命題「学は自身の第一主題について『存在するか』、『何であるか』問うことはない」を問題にしよう。スコトゥスのヴァチカン版編集註によれば<sup>14)</sup>、ヘンリクスの『スンマ』にはほぼ同様の主張が見出される。すなわち、「なぜなら、アリストテレスによれば、学において第一のものは、‘si est’ ‘quid est’ を前提しているからである」<sup>15)</sup>。他方、スコトゥスは『パリ報告』序章第三問第一項で、アヴィチェンナの命題として「いかなる学も自身の主題の實在 (esse) を証明することはない」を引用している<sup>16)</sup>。

さて、ヘンリクスから受け取られている先の命題と、後者の命題との相違は明らかである。それはまずヘンリクスの命題が「第一主題」を問題にしている単なる「主題」を問題にしているのではないという点であり、第二に、ヘンリクスの命題が「實在」だけでなく「何であるか」も含んでいる点である。第一の問題はさておき、学がその主題の「實在」を前提していることは一般的に認められることであろう。たとえば神学は神の實在を前提しているし、自然学は事物の運動の實在を前提している。そして一般に学はその主題の實在を前提してその何であるかを探究するものであろう。したがって、「實在」ばかりか、「何であるか」まであらかじめ明らかであるなら、学の探究は何についてあるのであろうか。

この点についてのスコトゥスの真意を探ることは、即、スコトゥスが形而上学の第一主題としての「存在」ens をどのようなものとして理解しているかを、探究することにはほかならない。実際、上に引用した一文でスコトゥスは、形而上学は「存在」ens を第一主題としており、それは端的に単純な概念であって、その「何であるか」も「存在するか」もあらかじめ明らかであ

ると言っている。しかし、第一主題の「実在」と「何であるか」がすでに明らかなか中で、なお何が形而上学において探究されるのであろうか。細かな問題はさておき、われわれは引き続き文を検討しよう。

「なぜなら『自体的存在』ens per se は、その諸部分の概念組み合わせの可能性について疑われるものである。一同様の理由によって、神は端的に単純な概念ではない。なぜなら、われわれは神を他から区別するような端的に単純な概念をもつことがないからである。—それゆえ、その種の概念〔端的に単純でない概念〕のいずれについても、『存在するか』の問いがあり、概念がそれ自体において誤りでないことの証明がある。それゆえ、神は、われわれに可能ないかなる概念に即しても、形而上学の第一主題ではない<sup>17)</sup>。

さて、「自体的存在」ens per se とは、一般的に「実体」を意味する。スコトゥスはまずこの概念について、それは端的に単純ではないゆえに、その諸部分の概念組み合わせの可能性が問われると言っている。つまり「存在」ens と「自体的」per se が矛盾をもたないかどうか問われると言っているのである。同様に、神についても、神は「無限な存在」ens infinitum と定義されるので<sup>18)</sup>、この概念についてもその諸部分の間に矛盾がないかどうか問われる<sup>19)</sup>。というのも、スコトゥスによれば、複数の実在的概念の間で、それらが複合されることに矛盾を生じることがないものがあるなら、それは「実在可能」であると見做されるからである。反対に矛盾があるのなら、「実在不可能」である<sup>20)</sup>。したがって複合概念によって定義されるようなものは、まず「実在可能か」が問われる。すなわち、「存在するか」の問いがある。したがって、そのようなもの、すなわち、複合的であって端的に単純でないものは、第一の学である形而上学の第一主題ではありえないと、スコトゥスは結論するのである。

ところで、スコトゥスは「端的に単純な概念」simpliciter simplex とは、より単純な概念に還元できない概念であると言う<sup>21)</sup>。たとえば、われわれは「人間」とか、「白」という概念を単純把握によって得るが、それは単純概念であっても端的に単純ではない<sup>22)</sup>。というのもそれはより単純な概念へ還

元することが可能と見られるからである。そしてこのように単純ではあっても端的に単純でないものは、論証を通してか、経験を通してしかそれが「実在する」ことは明らかでない。なぜなら、知性はそれをより単純な概念へ還元することができるのであるから、知性の中では、分割された概念の結びつきはただ可能性としてのみ考察されることになるからである。これに対して、端的に単純な概念は、知られるか、知られないか、のいずれかでしかありえない。すなわち、端的に単純な概念については知性がそれに出合うか、出合わないかの違いしかないのであるから、知性がそれに出合えば、それが何であるか、すでに知性には明らかであるし、さらに、出合ったことですのでそれが実在することも明らかである。そしてスコトゥスは、「存在概念」はこの種の概念であると言っているのである。

つまりスコトゥスによれば、実体や神が「実在すること」、またその定義のうちに内部矛盾をもたないことによって「実在しうるものであること」も、決して直接には明らかでない。したがってスコトゥスは、形而上学はそれについて問い、それについての証明を提示するものであると見ている。つまり形而上学は、「存在するか」も「何であるか」も、いずれも明晰であるところの「存在」ens を第一主題として、それを根拠にもつことで、実体ないし神について、その「何であるか」、またそれが「存在するか」を問い、その証明を見出してゆく学であると、スコトゥスは理解しているらしい。

しかし、このように大雑把に言うことはできるとしても、しかもスコトゥスが言うように、「存在」を端的に単純な概念として受け取るとしても、端的に単純であるがゆえに「何であるか」も「存在するか」も直接的に明晰な「存在」と、それについて直接には明らかでないところの「実体」や「神」との関係は、どのように受け取られるのであろうか。一われわれはさらに引き続き文を検討しなければならない。

「同様に、神について証明されるどんなものも、存在概念のうちに、存在を第一のものとして<sup>23)</sup>潜勢的に含まれている。なぜなら、ちょうど置換え可能な単純属性が、基体のうちに基体を第一のものとして含まれているように、

選言属性 (*passio disiuncta*) も、基体のうちに基体を第一のものとして含まれているからである。それゆえ、基体のうちには、基体を第一のものとして選言属性の一方が或る存在に一致することが含まれている。それゆえ、存在は『或る存在が第一のものである』という命題を、存在を第一のものとして潜勢的に含んでおり、それゆえまた、『存在するか』も『何であるか』も、存在は含んでいるのである。すなわち、このことゆえに第一存在は第一義的に〔存在を第一のものとして〕存在のうちに含まれている。それゆえまた、この全体の概念、すなわち、存在の概念によって第一存在について結論されるものは何であれ、存在のうちに含まれている。したがって形而上学は、終極的に (*finaliter*)、また、始源的に (*principaliter*) 神学なのである。なぜなら、ちょうどアリストテレスが『形而上学』第七巻で、形而上学は偶性についてよりも実体についてより主要にあると言っているように、類比をさらに進めれば、それは神についてより主要にあるからである<sup>24)</sup>。

この一文はかなり多くの事柄を凝縮している。簡略に説明すればつぎのようになる<sup>25)</sup>。(1)固有属性はその基体のうちに潜勢的に含まれている。たとえば、真、善、一、は「存在」のうちに含まれている。同様に(2)選言属性は基体のうちに含まれている。たとえば、必然か偶然か、現実態か可能態か、先行か後続か、は「存在」のうちに含まれている。それゆえ、(3)「存在」のうちには、選言属性の一方、たとえば、先行が、或る存在に一致することが含まれている。それゆえ、(4)「存在」は「或る存在が第一のものである」を含んでいる。それゆえ(5)第一存在が「存在するか」も「何であるか」も、「存在」のうちに含まれている。それゆえ、(6)第一存在、すなわち、神について結論されるすべての事柄は、「存在」のうちに潜勢的に含まれている。したがって、(7)形而上学は終極的にも始源的にも神学である。

まず、(1)~(6)は「神の存在証明」の全体像を示している。つまりスコトゥスはこのような推論を通して「存在」の直接的明晰性に基づいて、直接には明晰でない「神の存在」、また「神の何性」が結論されることを、簡略に示しているのである。そして直接的に明晰な「存在」と神について結論されるこ

とがらの間の関係を、「潜勢的に含む」という言葉を用いて表している。すなわち、直接的に明晰な「存在」は、実体や神の「存在するか」と「何であるか」を、潜勢的に含んでいるとスコトゥスは語っているのである。このことが何を意味するか、われわれは後に問題にしなければならない。実際、以上のことからスコトゥスは、形而上学は終極的にも始源的にも神学であると結論しているのである。しかし形而上学と神学の区別がトマス以来のスコラの流れであるとすれば、この結論は歴史の流れに逆行している。なぜなら、終極的にも、さらに始源的にも、形而上学が神学であるなら、始端から終端まで両者は同一であることにならうからである。われわれはスコトゥスがどのような意味でこのように言っているのか、その根拠を明らかにしなければならない。

## 2

スコトゥスの記述の検討を通して、スコトゥスの形而上学を理解するためには、スコトゥスにおいて直接的に明晰であると見做されている「存在」の概念と、他の存在との関わりを知ることが、必要であると判明したのであるから、まずはスコトゥスにおいて「存在概念」が直接的に明晰であることの根拠を探究することから始めよう。

簡略に言って、スコトゥスは「端的に単純な概念」とは、すでに述べたように他のより単純な概念に還元しえないものであると定義し、「存在概念」はその種の概念であるから明晰にしか把握されえないと述べている。すなわち、スコトゥスは「明晰な把握」とは、言わば「定義」definitio において実現している把握であると言う<sup>26)</sup>。ところで、定義は「共通的概念」によって作られる。そしてもっとも共通的概念は「存在概念」である。他方、何性を示すどんな概念であれ、「存在概念」を含んでいる。したがって、存在概念の明晰な把握なしには他の概念の明晰な把握はありえない。これに対して、存在概念は他の概念なしにも明晰に把握される。それゆえ、「存在概念」は明晰にしか把握されない第一の概念であるとスコトゥスは結論するのであ



る<sup>27)</sup>。

さて、スコトゥスにおいて大略以上のように言われる「存在概念」は、トマスにおいて一般に言われるところの‘ens’とは、明らかに異なっている。実際、トマスにおいて‘ens’は、具体的に「存在しているもの」を、より特殊な規定抜きに一般的に指し示すものであるが、スコトゥスにおける‘ens’は、むしろ他のすべてから抽象され、それ自身以外の何ものも形相的に含まないところの概念である。したがってスコトゥスにおいては、「存在の固有属性」*passio propria entis* さえ、存在に形相的に (*formaliter*) 述定できないと言われるのである<sup>28)</sup>。

すなわち、スコトゥスにおいて「存在」は他のいかなる概念もそれ自身のうちに形相的に含まない概念である。したがってこの概念から他の概念を分析的に引き出すことは不可能である。したがって、スコトゥスが、「存在」が形而上学の「第一主題」であると言っているとしても、このことは、「存在」が形而上学の「第一の原理」であると言っていることを意味しない。なぜなら、「原理」からは他のものが推論を通して引き出されるが、「存在」からは他の何ものも決して引き出されないからである。実際、他のすべてを本来的に含んでいる「第一原理」は、スコトゥスにおいて神であろう。しかし、言うまでもなく、神はわれわれのもつ学の原理にはなりえない。聖書神学でさえ、原理となるのは「啓示された限りのことがら」であって、神そのものではない<sup>29)</sup>。実際、スコトゥスにおいて形而上学の原理は、むしろ「全体は部分より大きい」とか、「現実態は本性上可能態に先立つ」とか、その他範疇を超えて超越的に言われる命題であり、「存在」は、その原理が通用する範囲を示す意味で、形而上学の第一主題と言われていると理解されるべきだろう。実際、周知のようにスコトゥスは、「存在」は神と被造物に一義的に述語されると主張している。このことは形而上学の原理が被造物だけでなく、神の何性にも一義的に適用されることの主張にほかならない<sup>30)</sup>。さて、このことからすれば、スコトゥスが、形而上学は「最終的に」*finaliter* 神学であると言うのは当然のことと言える。なぜなら、スコトゥスにおいて形而上学

の原理は神的事がらにも適用されて神学を形成するのであるから、ちょうどアリストテレスが形而上学は偶性より実体についてより主要にあると言うのと同じように、類比をさらに進めると、形而上学は被造物についてより神についてより主要にあると、言うことができるからである。同様に、形而上学の原理が神的事がらにも適用されて神学が形成されることから言えば、形而上学が「原理的に」 *principaliter* 神学であると言われるのも、頷かれることであるに違いない。

### 3

つぎにわれわれは、『『存在』はその他のすべてを潜勢的に含む』と言われる側面一言うまでもなく、これは少しも自明ではない—を検討しなければならない。

さて、全体はつねにその部分を含むのであるから、より全体的な概念は、つねにより部分的な概念を含んでいる。また同様に、より普遍的な概念はつねにより特殊な概念を含んでいる。この意味で、類は種を含み、種は個を含んでいると言える。しかし、類は種を「形相的に」含んでいるのではない。なぜなら、種は類がもたない特殊性をもっているからである。このような場合に、スコトゥスは「潜勢的に」 *virtualiter* 含むと言う。これはちょうど太陽が地上のさまざまな生命を産み出す力 (*virtus*) をもっているゆえに、太陽は「潜勢的に」地上のすべての生命の原因であると言えるように<sup>31)</sup>、類は種の基盤であり、種は個の基盤であるかぎり、種は個を、類は種を潜勢的に含むと言われ、また、実体は偶性の基体であるかぎり、実体は偶性を潜勢的に含むと言われ<sup>32)</sup>、そして「存在」は実体と偶性の両者に、さらに被造物と神に、一義的に述語されるかぎり、「存在」は実体と偶性を、さらに神と被造物を、「潜勢的に含む」と言われるのである。

たしかに、一方で他の何もかも含まないものが、他方で他のすべてを含む、と言うことは、はなはだしい矛盾に聞こえる。実際スコトゥスが「存在は、たとえ混ぜんとした認識対象 (*confusum cognitum*) であるとしても、混ぜんと

して認識される (*confuse cognitur*) ことはない<sup>33)</sup>と述べているのを知るとき、われわれは当惑を覚える。しかしながら、「混ぜんとしたもの」とは、存在がもっとも共通的な概念であるゆえに「多くのものを含んでいる」ことを意味し<sup>34)</sup>、他方、それが「混ぜんとして認識されない」ということは、それが形相的には「他の何もかも含まず」、それゆえ、それ自身だけで「明晰に認識される」ことを意味していることが分かれば<sup>35)</sup>、スコトゥスの矛盾めいた言い方にも、相当の理由があることが分かるのである。

さて、すでに述べたように、存在概念が形相的には他の何もかも含んでいないということは、知性の抽象力によってどんなに克明に存在概念自体を調べ上げて、存在概念以外には何も抽出されないことを意味している。したがって、存在概念が潜勢的に何を含んでいるかは、存在概念を抽象化することによって明らかになることはありえない。そうではなくて、それを明らかにするためには、われわれの経験の中で、存在概念が他の何と関わってわれわれの知性のうちに現れるか、ということを検討しなければならないのである。なぜなら、存在が潜勢的に含んでいるものとは、「存在」を共通の基盤としているもの、つまり存在概念が共通の概念としてそのものの概念のうちに含まれているところのものだからである。それゆえ、われわれは経験するものの中で、何らかの仕方存在概念が共通的に述語されるものが何かを探究しなければならない。すなわち、「存在」が潜勢的に何を含んでいるか、それを明らかにするためには、われわれの知性の中で「存在」が述語されるものを枚挙することが必要である。

しかしながら、このようにして枚挙されるものとは、結局、われわれが感覚を通して認識するところのすべてと、またそこから論理的に結論しうるすべてのものである。なぜなら、われわれが経験的に認識するところのものすべては、「存在」が本質的にか偶性的に述語できるものであるし、そこから論理的に結論しうるものとは、やはり経験的に認識されるものの中に本質的にか偶性的に含まれたものであるに違いないからである<sup>36)</sup>。実際、われわれは偶性ないし属性を感覚を通して知る。そしてスコトゥスによれば、われ

われはそこから実体の存在を結論することができる。すなわち、「かくかくの性質であるとか、かくかくの量であるとか、その他多くの偶性が同じもののうちに共存していることが見出される。ところで、その性質とその量が別々の存在であることは、一方が無くとも他方が存在することによって証明される。さらに、その性質もその量も、それらに共通の基体が存在する間に存在しなくなることがあることから、その共通の基体は、性質や量とは別の第三の存在であることが結論される」<sup>37)</sup>。こうして諸々の偶性、ないし属性だけでなく、そこから結論しうる実体についても、われわれは「存在」を述語することができる。それゆえ、スコトゥスによれば、「存在」は偶性と実体を潜勢的に含んでいると言うことができるのである。

他方、スコトゥスによれば、超自然的教え、すなわち、神の啓示が承認されるなら、神についても「存在」が述語される。実際、スコトゥスは『オルディナチオ』の最初の問いにおいて、「自然」を原罪の状態として受取り<sup>38)</sup>、他方、神の啓示を「超自然」として受け取ってこれら両者を対比しながら<sup>39)</sup>、神の啓示の必要性が自然的に了解されるものでは決してなく、信仰を前提してのみ了解されるものであることを鮮明にしている<sup>40)</sup>。したがってスコトゥスにおいても、神と被造物に「存在」が一義的に述語されることは、信仰を前提してのみ承認されることであって、「自然的に」は否定されるのである<sup>41)</sup>。しかし、言うまでもなく神学者スコトゥスは信仰を前提して神についても「存在」が述語されることを主張している。したがって、スコトゥスにおいて「存在」は、神をも潜勢的に含むと言わなければならない。

#### 4

われわれは以上のことを、スコトゥスにおける「存在の分割」*divisio entis* をたどることで整理しておこう。

スコトゥスは或るところで、「存在は第一の分割で何性的存在と、何性をもつ自存する存在に分けられる」<sup>42)</sup>と言っている。ここで「何性的存在」*ens quiditative* とは、存在の何性的側面である。他方「何性をもつ自存する

存在] *ens habens quiditatem quod est ens subsistens* とは、何性をもって存在しているもの、つまり現実に具体的に「存在しているもの」である。したがって後者の存在には実存 (*esse*) が含まれているが、前者には実存は含まれていない<sup>43)</sup>。しかし、以下の分割はすべて前者の存在についてのみ進むので、スコトゥスはまず「存在」のうちから実存を外し、残る「何性的存在」についてのみ分析を続けることになる。このことは恐らくつぎのことと関係する。すなわち、スコトゥスによれば、学問は本来対象の実存を問題にしない<sup>44)</sup>。なぜなら、学問は一般に対象の何性を問うからである。実際、神の実存は別として、被造物の実存は偶然的なものである。他方、学問は必然を対象とする。したがって、「存在の分割」が学の対象としての存在分析として進むなら、まずは実存がそこから外されなければならないのである<sup>45)</sup>。

さて、第二の分割についてスコトゥスはつぎのように言っている。すなわち、「存在は先に無限と有限に分けられ、つぎに十個の範疇に分けられる。なぜなら、それらの一方、すなわち『有限』は、十個の範疇に共通だからである」<sup>46)</sup>。つまりスコトゥスによれば、何性的存在は十個の範疇に分けられるよりも先に「無限存在」と「有限存在」に分けられるのである。そして「無限存在」、すなわち、神には分割はありえないので、より以上の分割は「有限存在」についてのみ進む。そしてこの「有限存在」が十個の範疇に分割されるのである。

そして範疇的存在は言うまでもなく、下位の類、種、個別者へと分けられ、そこで存在の分割は停止する。

なお、超越概念 (*transcendens*) については、スコトゥスは、それは十個の範疇への分割以前に「存在」に一致すると、明確に述べているが<sup>47)</sup>、「選言的属性」*passio disiuncta* のように一方が無限存在にのみ一致するものもあるので、すべてが有限と無限への分割以前に「存在」に一致するとは述べていない<sup>48)</sup>。すなわち、或る超越概念は有限と無限への分割以前に「存在」に一致し、或る超越概念はただ十個の範疇への分割以前に「存在」(有限存在、あるいは、無限存在) に一致していると思われる。

## 5

スコトゥスにおいて「存在」は以上のように分割される。つまりスコトゥスによれば、形而上学の第一主題である「存在」はこれらすべてを潜勢的に含んでいるのである。ただし、すでに述べたように、第一主題の「存在」は明晰に知られ、形相的には他の何も含まない概念なのであるから、それは決して実存を含んだ「存在」ではなく、あくまでもそれを捨象したところの「何性的存在」である。したがって形而上学の主題も、恐らくスコトゥスにおいては「何性的存在」一般であって、実存はそれとの何らかの関わりにおいてのみ問題になると言われるべきだろう。しかしながら、このことは、すでに述べたように実存が神においてのみ必然的であることから、充分了解されることであろう。今ここに生じる問題は、むしろ形而上学の主題が、その第一主題が潜勢的に含んでいるところの、何性的存在のすべてであると言われるとき、それは他の特殊学の主題との間にどのような関係をもつのか、ということである。

すでに述べたように、形而上学は「超越的原理に基づいて」何性的存在の全体を研究する。というのも、学は本来或る「原理」に基づいて主題を扱うものだからである。ところで、スコトゥスは学の原理を「自明な命題」*propositio per se nota* であると主張する<sup>49)</sup>。そして「自明な命題」とは、その命題を構成している「諸名辞から明らかな命題」であると定義している<sup>50)</sup>。たとえば、「全体はその部分より大きい」とか、「白は黒ではない」とか、その名辞からただちにその命題の必然的一致（肯定的真理）、必然的不一致（否定的真理）が明らかな命題がそのようなものである<sup>51)</sup>。実際、これらの命題は名辞が知られれば、ただちにその真理が明らかである。言うまでもなく、これらの命題は自然的な経験から知られるものであるかぎり、自然的な諸学の原理を構成する。そして、その原理が特定の類に限定されるかぎり特殊学の原理となり、類を超えているかぎり、形而上学の原理となる。

さて、われわれはこれまでの検討を通して、スコトゥスの形而上学の規定

を明らかにするために、第一主題が「存在」であること、主題は、それが潜勢的に含んでいるところの「存在の全体」であることを見てきたのであるが、つぎにわれわれは、形而上学の「諸原理」とこれらのものとの関係を見なければならぬ。ところで、スコトゥスは第一主題(第一対象)<sup>52)</sup>を定義してつぎのように言っている。すなわち、「第一対象とは、それ自体のうちにそれを第一のものとしてその所有のすべてを潜勢的に含んでいるものである」<sup>53)</sup>。ここで「所有」habitus は具体的には学知を指す。したがって当面の課題に当て嵌めれば、「存在」ens が形而上学の第一主題であることは、「存在」それ自体のうちに、「存在」を第一のものとして、形而上学のすべての真理が潜勢的に含まれていることであると言える。ところで、「原理」はすでに述べたように「自明な命題」であり、それは必然的真理である<sup>54)</sup>。またそのような原理から結論されるものも、スコトゥスによれば推論の形式的明証性を通して原理の必然性を受け取って、必然的真理であることは明らかである<sup>55)</sup>。したがって、形而上学のすべての真理とは、形而上学のもつすべての原理と結論であると言える。

しかしながら、「存在」は「存在全体」を潜勢的に含むのであるから、「存在」が潜勢的に含んでいる真理は、形而上学の真理だけでなく、特殊学の真理でもあると言わなければならない<sup>56)</sup>。しかし、特殊学が形而上学から独立に存在していることからすれば、このことはどのように理解されるのだろうか。もしも形而上学の第一主題が他の特殊諸科学の真理をも含むなら、すべての特殊諸科学は、始源的に、また終極的に形而上学であると言えることになるだろう。

スコトゥスは、形而上学は他の特殊学の基礎概念をより明晰にすることができると言っている<sup>57)</sup>。すなわち、たとえ形而上学と他の特殊諸科学は相互に独立しているとしても、つまり形而上学を知らずに幾何学者になることはできるという意味で、それぞれの学の原理は独立に知られうるとしても<sup>58)</sup>、形而上学はわれわれの知性において第一に明晰に知られるところの「存在」を第一主題としていることに基づいて、他の諸学の原理を構成している諸概

念をより明晰にすることができると、スコトゥスは言うのである。すなわち、スコトゥスは決して形而上学なしには他の特殊学の真理は成り立たないとは言わない。むしろ形而上学は最終的な基礎を特殊諸科学に提供し、諸科学をより完全にすることができると、スコトゥスは見ているのである。

ところで、諸科学的知識の真に完全なかたちは、神の知性のうちにある。それゆえ、言うまでもなくスコトゥスにおいても、至福直観によって神の知性のうちのアイデアを見ることができれば、それこそ完全で明晰な知識を得ることである<sup>59)</sup>。形而上学による明晰化は、言わばその手前の明晰化であり、至福直観の完全性から見れば、まだ不完全なものである。さて、形而上学における第一主題の把握も、この至福直観と対比されてスコトゥスにおいて説明されている。すなわち、「至福者による直視は、ちょうど形而上学における存在の認識である」<sup>60)</sup>。「それは言わば、学知に本性的に先立つ、主題の非複合的完全把握である」<sup>61)</sup>。スコトゥスは、至福者のもつ神学を、至福者が神を直接見る恩恵に浴していることから論じている。つまり至福者の神学においては、われわれの神学とは異なり、第一主題、すなわち、神の、'si est', 'quid est' は、直接的に明晰である。しかし、スコトゥスによれば、至福者として、神のすべてを見ることが許されているのではない<sup>62)</sup>。それゆえ自余の部分は現前した神に潜勢的に含まれていると判断されなければならない。これと同様に、われわれの知性における「存在」の明晰な認識は、形而上学の第一主題の非複合的完全認識であるが、主題の全体はそれに潜勢的に含まれていると判断しなければならない。そして第一主題の認識は「学知に本性的に先立っている」と言われているように、その学知の原理が知られて形而上学が実際に成立するのは、「存在」の認識と同時にではなく、それ以後のことである。つまり「存在」の明晰な認識を端緒として形而上学に関わる他の諸名辞が明晰にされ、この諸名辞の明晰化によって諸名辞の間の必然的一致ないし不一致が発見され、こうして超越的な諸原理が発見されるときに到って、はじめて形而上学は成立するのである。



## 終わりに

以上、われわれはスコトゥスの形而上学の概念を検討してきたが、言うまでもなく、われわれはまだはじめに触れた問題を解決できていない。すなわち、スコトゥスにおいて学知の第一対象と能力の第一対象は区別されるべきであるにもかかわらず、形而上学の第一対象と知性の第一対象は同じであることは、どのように解されるべきか、という問題である。実際、われわれはこの考察において、スコトゥスにおいて存在であるかぎりの存在を主題とする形而上学が、明晰に認識される「存在」を第一主題としていることの意味を、明らかにしただけである。われわれが先の問題を解決するためには、さらにスコトゥスにおける知性能力とその第一対象の関係を明らかにしなければならないし、その上、学知一般と、能力一般に関して、それらと「対象」、及び、「第一対象」の関係を明らかにしなければならないだろう。これらのことは、認識能力とその対象がもつ関係と、認識能力が獲得した認識（所有）とその対象がもつ関係を、解きほぐす仕事になる。実際、スコトゥス自身がこの両者の関係を同一の関係と見ていない以上<sup>63)</sup>、複雑に絡み合ったこの関係を解きほぐすことが、スコトゥスを理解する上で是非とも必要な仕事であることは明らかである。われわれの仕事はその第一段階に過ぎないと言える。

## 註

- 1) Cf. Honnefelder, L., *Ens inquantum ens, Der Begriff des Seienden als solchen als Gegenstand der Metaphysik nach der Lehre des Johannes Duns Scotus*, Aschendorf, 1979, p. 99 以下。
- 2) *Ordinatio*, prologus~II, distinctio 3; *Opera omnia Ioannis Duns Scoti*, ed. Vatican, I~VII, 1950~1973.  
*Lectura*, prologus~II, distinctio 6; *Opera omnia Ioannis Duns Scoti*, ed. Vatican, XVI~XVIII, 1960~1982.
- 3) Marianus Müller(ed.): *Joannis Duns Scoti Tractatus de Primo Principio*, Freiburg, 1941.

Evan Roche: *The De Primo Principio of John Duns Scotus*. A revised text and a translation, St. Bonaventure-Louvain, 1949.

Allan B. Wolter (ed.): *John Duns Scotus: A Treatise on God as First Principle*, Chicago, 1966.

- 4) Felix Alluntis (ed.): *Obras del Doctor Sutil Juan Duns Escoto*. Cuestiones cuodlibetales, Madrid, 1968.
- 5) *Ord.*, prol. p. 3, q. 1-3, n. 142; *Opera omnia*, ed. Vatican, I, p. 96.
- 6) *Ibid.*, n. 148; *ibid.*, pp. 100-101.
- 7) スコトゥスの『任意討論』第13問題は、認識能力と対象の関係を論じている。
- 8) Bérubé, C.: *La première école scotiste*, Preuve et Raison à L'Université de Paris, Logique, Ontologie et Théologie au XIV<sup>e</sup> siècle, J. Vrin, Paris, 1984, pp. 9-24, 引用は, pp. 11-12.
- 9) ヘンリクスの綽名 'doctor solemnus' は、種々の意味で解釈される。一つは、彼が1277年の禁令発布に関わったことから、彼の「保守性」を示す、という解釈がある。(Brown, J. V., *Divine illumination in Henry of Ghent*, Recherches de Théologie Ancienne et Médiévale, 1974 (41), pp. 177-199, sp. p. 180, note 2) しかし、彼の作品のすべてが、定期討論、及び、任意討論の記録であることからすれば、むしろ彼が討論会を「毎年その時期が来る度に繰り返し開いていた」ことを示しているのではないかと推測される。
- 10) スコトゥスは初期の著作『パリ報告』の中で、「第一主題」の性格を六つ列挙している。しかし、それが異論紹介の後の反論の位置にあるところから見て、これはスコトゥス自身の見解というよりも、恐らく当時一般に言われていた規定を集めたものと思われる。すなわち、(1) ちょうど能力がその第一対象によって規定されるように、それによって学問が規定される。(2) それによって学問が自身の尊厳 (dignitas) を得る。(3) ちょうど命題において述語は主語について言われるものであるように、学問のうちの他の考察がそれについて言われる。(4) その学のうちで知性に出合う第一のものがそれであり、他の事柄がその根拠の下に探究される。(5) それ学問の諸原理の主語でありえる。(6) 学問のうちでその固有性と属性が考察される。 *Reportatio paris.*, prol., q. 1; ed. Vivès vol. 22 p. 7a.
- 11) かつてジルソンは、スコトゥスがアヴィチェンナを頻繁に引用していることから、スコトゥスのアヴィチェンナ主義を唱えたが、後にバリックが、スコトゥスの引用しているアヴィチェンナはすべてヘンリクスが引用している言葉であることを証明した。 Balic, C., *Circa positiones fundamentales I. Duns Scoti*, Antonianum, 28 (1953), p. 276.
- 12) Olivier Boulnois, *Analogie et univocité selon Duns Scot: La double destruction*, Les Etudes Philosophique, n. 3-4/1989, pp. 347-369.

- 13) *Ord.* I, d. 3, p. 1, q. 1-2, n. 17; ed. Vat., III p. 9.
- 14) *Opera omnia* ed. Vatican III, p. 9, note (T)3.
- 15) Henricus Gand, *Summa* a. 19 q. 1 (Paris., 1520, I f. 115 C).
- 16) *Reportatio Paris.*, prol., q. 3, a. 1 *Opera omnia* ed. Vivès, vol. 22, p. 46b.
- 17) *Ord.* I, d. 3, p. 1, q. 1-2, n. 17; ed. Vat., III, p. 9.
- 18) *Ibid.*, n. 58; *ibid.*, p. 40.
- 19) *Ord.* I, d. 2, p. 1, q. 1-2, n. 136; ed. Vat., II, p. 208 *De primo principio* 4-64 ed. Wolter 1966.
- 20) 神でさえ矛盾は創造しえないと言われる。 *Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 4, n. 79; ed. Vat., VII, p. 428.
- 21) *Ord.* I, d. 3, p. 1, q. 1-2, n. 71; ed. Vat., III, p. 49.
- 22) *Ibid.*
- 23) ここで「存在を第一のものとして」というのは、原文ではたんに ‘primo’ である。このような訳の理由を小論で説明することには無理があり、したがって、以下の考察でも、この「それを第一のものとして」の部分を考慮の外に置いてスコトゥス形而上学の検討を続ける。たしかに厳密にはこの言葉を考慮の外に置くことは、スコトゥスの形而上学の理解を中途半端なものにする。すなわち、以下の考察の第5節でも問題になる。しかし、目をつむる以外にないだろう。ただこの言葉の意味は、アリストテレス『分析論後書』第一巻第四章にあるところの「第一のもの」、つまり、たとえば「内角の和が二直角である」ことは「三角形」を「第一のもの」とした命題である、とされているところから取られている。すなわち、ちょうど「内角の和が二直角である」ことは「三角形」を第一のものとして論証されたとき、論証が完全なものとなるように、何であれ、「存在」を第一のものとして論証されるときその論証が完全なものとなるような命題こそ、スコトゥスにおいて形而上学を構成する命題である。
- 24) *Ord.* I, d. 3, p. 1, q. 1-2, n. 17; ed. Vat., III, pp. 9-10.
- 25) Cf. 上註 23.
- 26) *Ord.* I, d. 3, p. 1, q. 1-2, n. 72; ed. Vat., III, p. 50.
- 27) *Ibid.*, n. 80; *ibid.*, pp. 54-55.
- 28) ‘formaliter’ に述べられるとは、‘per se primo modo’ に述べられることと同義である。スコトゥスはつぎの個所で、存在の固有属性は存在に ‘per se primo modo’ に述べられることはないことを証明している。 *Ord.* I, d. 3, p. 1, q. 3, nn. 134-136; ed. Vat., III, pp. 83-85.
- 29) *Ord.* prol. p. 3, q. 1-3, n. 204; ed. Vat., I, pp. 137-138.
- 30) Cf. *Lec.* I, d. 3, p. 1, q. 1-2, n. 113; ed. Vat., XVI p. 266.
- 31) スコトゥスにおける ‘virtualiter’ の基本的使用は、第一に、「結果が原因のうち

- に在る」と言う場合に見られる。 *Lec. I, d. 2, p. 2, q. 1-4, n. 272; ed. Vat., XVI p. 215.*
- 32) *Ord. I, d. 8, p. 1, q. 3, n. 116; ed. Vat., IV p. 208.*
- 33) *Lec. I, d. 3, p. 1, q. 1-2, n. 69; ed. Vat., XVI p. 250.*
- 34) *Ibid.*
- 35) *Ibid.*
- 36) *Ord. I, d. 3, p. 1, q. 1-2, n. 35; ed. Vat., III p. 23.*
- 37) *Ord. I, d. 22, q. u., n. 7; ed. Vat., V p. 344.*
- 38) *Ord. prol., p. 1, q. u., n. 37; ed. Vat., I p. 21.*
- 39) *Ibid., nn. 57-94; ibid., pp. 35-58.*
- 40) *Ibid., n. 12; ibid., p. 9.*
- 41) *Ibid., n. 33; ibid., p. 19.*
- 42) *Lec. I, d. 1, p. 1, q. 2, n. 66; ed. Vat., XVI p. 83.*
- 43) *Ord. I, d. 36, q. u., n. 36; ed. Vat., VI p. 285.*
- 44) *Quodl., q. 7, nn. 8-9; ed. Vivès p. 290.*
- 45) したがって、下位分割されるいずれの存在にも、「実存」は外から、言わば偶性的に述定される cf. *Ord. II, d. 3, p. 1, q. 3, nn. 61-64; ed. Vat., VII p. 418-420.*
- 46) *Ord. I, d. 8, p. 1, q. 3, n. 113; ed. Vat., IV pp. 205-6.*
- 47) *Ibid.*
- 48) *Ibid., n. 115; ibid., pp. 206-7.*
- 49) *Ord. I, d. 3, p. 1, q. 4, n. 230; ed. Vat., III pp. 138-139.* なお拙稿「ドゥッス・スコトゥスによる照明説批判」、『ボナヴェントゥラ紀要』第六号、東京ボナヴェントゥラ研究所、1989年、pp. 71-86 参照。
- 50) *Ord. I, d. 2, p. 1, q. 1-2, n. 15; ed. Vat., II p. 131.*
- 51) *Ord. I, d. 3, p. 1, q. 4, n. 232; ed. Vat., III p. 140.*
- 52) スコトゥスは『レクトゥーラ』では、「第一主題」*primum subiectum*、『オルディナチオ』では、「第一対象」*primum obiectum* と言っている。意味は同じである。なお cf. O' Connor, E. D., *The scientific character of theology according to Scotus*, De Doctrina Ioannis Duns Scoti, vol. III, Roma, 1968, pp. 3-50, sp. p. 9 以下。
- 53) *Ord. prol., p. 3, q. 1-3, n. 142; ed. Vat., I p. 96.*
- 54) *Ord. I, p. 1, q. 4, n. 230; ed. Vat., III pp. 138-9.*
- 55) *Ibid., n. 233; ibid., p. 140.*
- 56) 上註23で述べたように、以下の問題は形而上学の真理が「存在」を「第一のもの」として主張されることを考慮しないで、一応の解決を与えられる。
- 57) *Ord. I, d. 3, p. 1, q. 1-2, n. 81; ed. Vat., III pp. 55-6. Ord. prol., p. 4, q.*

- 1-2, n. 216; ed. Vat., I pp. 147-8.
- 58) *Ibid.*
- 59) *Ord. prol.*, p. 4, q. 1-2, nn 215-6; ed. Vat., I pp. 147-8.
- 60) *Ord. prol.*, p. 3, q. 1-3, n. 170; ed. Vat., I pp. 113-4.
- 61) *Ibid.* p. 114.
- 62) *Ibid.*, n. 203; *ibid.*, p. 137.
- 63) *Ibid.*, n. 148; *ibid.*, pp. 100-101.